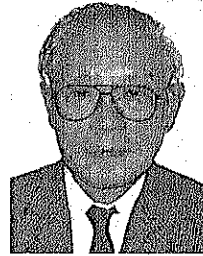


訓練所開設 “25周年記念”に寄せて



訓練所顧問医
塩原 順四郎

『協力隊との関わり』

訓練所が開設されて以来、昭和伊南総合病院は協力病院としての関係をもってきて、そんな中、私自身、平成5年から今日まで顧問医として訓練生と直接関わってきた。

『顧問医として』

この間に訓練所に入所してきた候補生は5,400人以上となり、予防注射は大凡50,000回以上やったことになる。しかし幸いに事故は一度もなかった。これも候補生達が皆、立派な体力を持っていた証拠と考えている。

仕事を一緒にしてきた看護婦さんは平成5年当時の北原たき子さん、向田徳江さん、そして古住裕子さん、菊池陽子さん、相田亜希子さん、外処恵美さん、それに現在の目黒貞子さん、坂井雅帆さんで、8人になり、皆素晴らしい人たちで、大変助けてもらった。

勿論この間、いやな事が無かったわけではない。隊員派遣に伴う身体上の見解の相違。講義で、疾病に対する認識の相違からくる、候補生の不満等々…。

『グアテマラ、ホンジュラスの隊員視察』

平成6年3月、向田看護婦さんと2人で派遣され、サンビセンテ結核病院等の宮田さんらを、ホンジュラスではサンフェリーベ病院等で小塩さんらを訪れた。話しの中で肉体的な問題は無く、環境の違いから来るストレスからの精神的な苦勞の実情を聞いてきた。

『ネパール、ポカラ市と駒ヶ根市』

国際協力友好姉妹都市の関係で、平成13年JICA協力隊のご尽力で、外務省の草の根の無償資金制度を活用して、ポカラ市に母子センターを設置しようとする話が具体的になってきて、“駒ヶ根市のネパール交流市民の会”でも大いに盛り上がったが、ネパールの政情が悪化し、今のところ、日の目を見ていないのは誠に残念である。

駒ヶ根市民の誇りである協力隊訓練所の一層のご発展を祈っております。

平成16年10月

ISO14001を認証取得しました

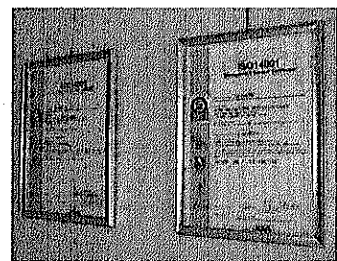
総務チーム 足達将士

ISO14001とは、国際標準化機構（International Organization Standardization）が発行した環境マネジメントシステムの国際規格です。この国際規格は様々あり、例えばクレジットカードの形状や信号機の色、消火器の品質等もこのISOに登録され、その中の14000番台は環境面に関することです。

日頃から取り組んでいることは、光熱水料の削減やコピー用紙の削減といったところですが、その根源には、森林破壊や地球温暖化、廃棄物処理などの問題があります。電気・ガス・コピー用紙を減らすことによって、このような問題を直接解決することには結びつきませんが、常日頃からこうした問題を意識しながら生活することにより、地球環境保全や事業の取り組み方などの意識を芽生えさせることが出来ます。1人1人の意識がとても大切であり、そのために最大限の努力をする。これがISO14001の最も重要な部分です。そのため、近所の居酒屋のトイレの電気が常に点灯しているところを見ると、「スイッチOFF」をしたくなる、そんな衝動に駆られることが度々あります。

もう私もすっかり環境管理推進員!?皆さん、今日もお昼の消灯よろしくお願いしますね!!

TOPICS





訓練所と共に



青年海外協力隊長長野県OB会 会長
横尾 和人

青年海外協力隊駒ヶ根訓練所、開設25年おめでとうございます。心よりお喜び申し上げます。

駒ヶ根訓練所開設の数年前に発足した僅か数十名の当会にとって県内に協力隊事業の大きな拠点ができたことを当時大変喜ばしく思いました。地方で協力隊が十分認知されていない時期であったため大変心強く感じたものです。それから25年の間、駒ヶ根訓練所の歩みとともに多くの協力をいただきOB会活動を進めることができました。改めて御礼申し上げます。

さて、国内ではここ10年あまり外国との文化交流や国外からの多数の訪問者など、外国との接点は大変増加しました。一方、地方では開発途上国の生活習慣・文化・宗教は、知る機会に限られ、特にアジア以外のアフリカ、中東、中南米、大洋州の情報は乏しいのが現状です。先進国の日本が考えるグローバル社会は、まさに

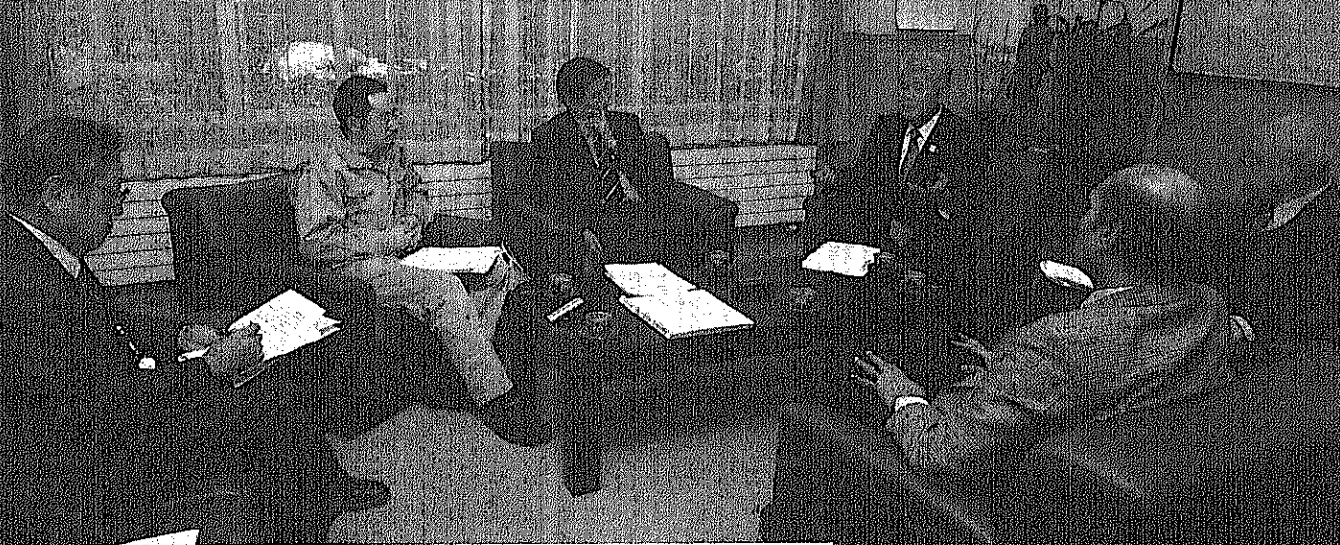
全地球的、多種多様な生活の理解が不可欠であります。更に、開発途上国の生活習慣や創意工夫は、閉塞感のある日本人が学ぶべきところが数多くあるのではないのでしょうか。その点で駒ヶ根訓練所が進めている国際理解の啓蒙は、今後ますます重要になってくるものと思います。小中学校あるいは高校への講師派遣や国際理解の公開講座を通しての異文化理解・模擬体験する機会は、これからを担う次世代の日本人の五感に強く働きかけるものと思います。また、駒ヶ根訓練所を巣立った隊員は10,000人を超え、地域で異文化理解を進める上で大きな財産と思います。

大きな可能性を持つ駒ヶ根訓練所が、訓練業務をベースに地域との協調が深まり、更に発展することを願います。



毎年恒例、OB会主催の海外技術研修員・アジア高校留学生歓迎会の一コマ。マレーシアOBの果樹園に集まり、リンゴ狩り、おもちつき、鍋パーティー等行って楽しく交流を深めています。

駒ヶ根青年海外協力隊訓練所 回顧を発展に向けて



■出席者

中原正純（駒ヶ根市長）

窪田雅則（NPOトカルパのひかり会長）

北原岳志（駒ヶ根青年会議所OB）

高坂 保（元訓練カウンセラー）

ムンシ・アザド（語学講師）

小宮英夫（訓練所所長）＜司会進行＞

座 談 会

■駒ヶ根訓練所との関わり

司会 本日はお忙しいところ、皆様お集まりくださりありがとうございます。

協力隊の駒ヶ根訓練所は、昭和54年に開設されてから、25周年を迎えることができました。今日は、25年をそれぞれのお立場から振り返っていただき、歴史を紐解いていただくと同時に、訓練所に対するご意見やご要望を伺いたいと思い、お集まりいただきました。

早速ですが、どういったきっかけで訓練所と関わりをお持ちになったのか、まず、中原市長さんからお話いただければと思います。

●開設時の文化的ショック

市長 当時、訓練所の誘致に関わっていた市長は座光寺久男さんでしたが、その頃から私は、駒ヶ根市議会議員という立場で関わりをもって

きたわけです。そして、竹村健一前駒ヶ根市長の時、この素晴らしい施設が、この地に建設をされて、開所式の日には、当時の法眼晋作総裁が見えてお話しを聞き、その時に私は、議員として文化的なショックを受けました。国際協力の重要性というか、これからの国際化への街づくりというものに、積極的にかかわっていく必要があるなということに改めて認識すると同時に、いやこれは素晴らしい施設が駒ヶ根市に来てくれたと、これからの地域づくりにとっても、国家的プロジェクトを推進していく上で、大きな役割を担うこの施設と地域が相互交流をしながら、補完しあってやっていくことの大切さを議員時代に認識を新たにしました。市長になりましてからも政策の柱にすえて、地域の皆様とともに国際協力、国際化時代に向けての地域づくりをしていきたいなと決意を新たにしてきましたが、もう早いもので25年です。駒ヶ根市は、この施設がこの地に来たことによって、市民意識を含めて大きく変わってきたと思って



います。

司会 ありがとうございます。市政の立場からお話しを伺いましたが、長らく教育に携わってこられた、高坂先生の場合はいかがだったでしょうか？

●教育長として、訓練カウンセラーとして

高坂 私は駒ヶ根の学校には昭和42年からお世話になりまして、赤穂中学校、その当時生徒で窪田君もいて(笑)、東中学校、それから赤穂小学校と20年近く勤めさせていただいたのですがね、実は大変お恥ずかしい話だけれども、現職教員のころ、協力隊訓練所がここにあるということはよく承知しておりましたけれども、そこでどんな訓練をしてるのかについては、承知をしていなかったというのが実情なんです。ところが、昭和63年に退職して、平成元年から教育長を9年させていただきました。その時以来です、実は市長さんの代理で訓練所の入所式や修了式で挨拶をするという機会を与えられたわけで、これが訓練所とのかかわりを持つことになったわけです。JICAの理事さんや所長さん、あるいは隊員候補生のみなさんとお話をする中で、これは素晴らしいところだ、市長さんが、これは市の宝だと常に言われておりますけれども、そういうことを実感をしたわけです。

それから、中学生をネパールへ派遣したり、教員の初任者研修に訓練所の参観実習を取り入れました。それで、平成7年の3次隊から8年間訓練カウンセラーをさせていただきました。こんなことで、ここの深い関わりができて、その間に協力隊の現地の活動視察を何回かさせていただき、本当に感動をして、カルチャーショックというはおかしいけれども、なんとしてもこれは協力隊の応援団になりたいなど、こんなことを思って今日まで来ているというところでございます。

司会 市民の立場といたしますか、窪田さんは、NPOも立ち上げられてご支援いただいているわけですが、いかがでしょうか。

●「協力隊こそ駒ヶ根の財産だ」

窪田 私は青年会議所のメンバーだったので

が、青年会議所と協力隊は、開設当時から色々な交流があったようです。高坂先生が平成元年に教育長になられた時に、我々が青少年委員会で、自衛隊の体験入隊と同じように中学生を協力隊に体験入隊をさせようとしたことをきっかけに、訓練所にちょいちょいお邪魔するようになりました。

日常生活とは違う情報にふれ、いろいろな事を勉強させて頂き協力隊は面白いところで面白い人が大勢いる場所だと感じました。

1992年私が理事長の時に、「協力隊訓練所こそ駒ヶ根の財産だ」と気づき活動の中核にしました。そこで、駒ヶ根市民と協力隊の交流を1. 訓練期間中の市民との交流 2. 派遣中は任地への応援 3. 帰国してからの交流 この基本を構築するために駒ヶ根ネットワークを始めました。その一環で始まったのが、「小さな国際貢献運動」と呼ばれていた「小さなハートプロジェクト駒ヶ根プロジェクト」でその第一号が半田好男隊員が行っていたネパール・トカルパ村女性の識字教室支援プロジェクトでした。

2年後、半田先生が帰国してその活動報告を聞き感動し、この事業をもっと市民と一緒に進めようと決意し、郵便局で報告会、中学校で報告会と支援の輪がどんどん広がっていきました。トカルパ村からも活動報告が送られたり、受け入れ団体ディーオフォーラムができたりして交流が始まりました。そんな中で、続ける事の大切さを協力隊から教えられ、ライフワークでこの運動を続け、市民全体で盛り上げていこうとNPO法人「トカルパのひかり」を組織し現在にいたっていますが、現状は治安の悪い中での活動で歯がゆい思いをしています。

司会 トカルパの光については、後ほどもう少し具体的にお話を伺いたと思います。同じ市民の立場から、北原さんいかがでしょうか。

●協力隊訓練所と歩んだ13年間

北原 はい、私はですね、今、窪田さんがおっしゃった、窪田さんが理事長の時に駒ヶ根青年会議所に入ったんですけど、僕、国際化委員会に入っちゃったんですよ。何にも知らない時に、「とにかく訓練所に行ってください」とよく言われて。それ以来、私の青年会議所の活動とい

うのは、ほとんど国際化畑を歩いてきた形になってしまいました。僕は平成4年に入会したんですけど、平成10年に国際化の委員長を仰せつかって、その年が20年目の集いの年だったんですね。なので、あの年から国際広場というのが大きな規模になってしまいました。今になると、ちょっとやりすぎたと、自分たちの能力以上の企画を立ててはいけなと(笑)あの年の反省だったんですけど。青年会議所の活動イコール協力隊訓練所との街づくりの活動であったと、というような歴史で、去年、青年会議所を卒業しましたけれども、ほとんど13年間、ずっと訓練所とやってきたということです。

司会 アザド先生は語学講師として長らく指導いただいておりますが、もともと協力隊との関わりというのはどういうものだったのでしょうか。

●広尾～駒ヶ根～二本松そして駒ヶ根

アザド 私はもともと東京で日本語を勉強していました。外語大で夏の間ベンガリ語のサマーコースの講師をしていて、そこで、協力隊が、ベンガリ語講師を探していると情報があって、その時申し込みして「6ヶ月の期間仕事できればやってください」と。その頃、伴正一さんが事務局長していて、私が最初に会ったのが今から30年程前の話になります。昭和48年からパングラデシュと隊員の派遣が始まったらしいです。その時は、二つの訓練所がありました。代々木オリンピックセンターと広尾訓練所があって、訓練期間は2ヶ月、2ヶ月で、4ヶ月あって、最初は広尾で始めて、2ヶ月終わったら、代々木の方で2ヶ月やりました。私は昭和50年に臨時で始めて、3年半広尾で仕事をしました。その間に、駒ヶ根に訓練所ができるという話があって、一度、訓練所の建設中のときに、一回みんなで来たことがありまして、その時初めて、この訓練所を見たんですね。駒ヶ池の近くに民宿、今大きくなりましたが、協力隊関係のスタッフと我々みんなが泊まって、どんな訓練にするか等について話合いました。

司会 この訓練所が開設、オープンした時からいらっしゃるんですね。

アザド 途中で、10年前の平成6年の末頃、このアジア言語は、二本松(福島県二本松市)の訓練所ができたとき、移動しました。

市長 私が二本松に行ったときに行き会って、「駒ヶ根にまた来たい」って言っていました。駒ヶ根市もネパールとやって行きたいという思いもあったから、みなさんをまた駒ヶ根に戻してもらえるように所長にお願いしたりしてね。

アザド だから、平成6年度の最後から二本松の新しい訓練所に移されて、そこで1年半くらい、5回訓練をしました。その後、またこちらへ戻りました。最初に向こうの所長から「転勤になります」と聞いたときには嬉しくて。(笑)私にとっても駒ヶ根の町はすごい意味があるんです。私の子供がこっちで生まれたし、ここの幼稚園にも通っていたし、今は大きくなって大学に通っていますけれども、そういう関係で子供の友達とかいっぱいいます。そういうことで、私の人生の半分以上日本にいて(笑)、その中で駒ヶ根が一番長いんです。

司会 もう故郷ですね。

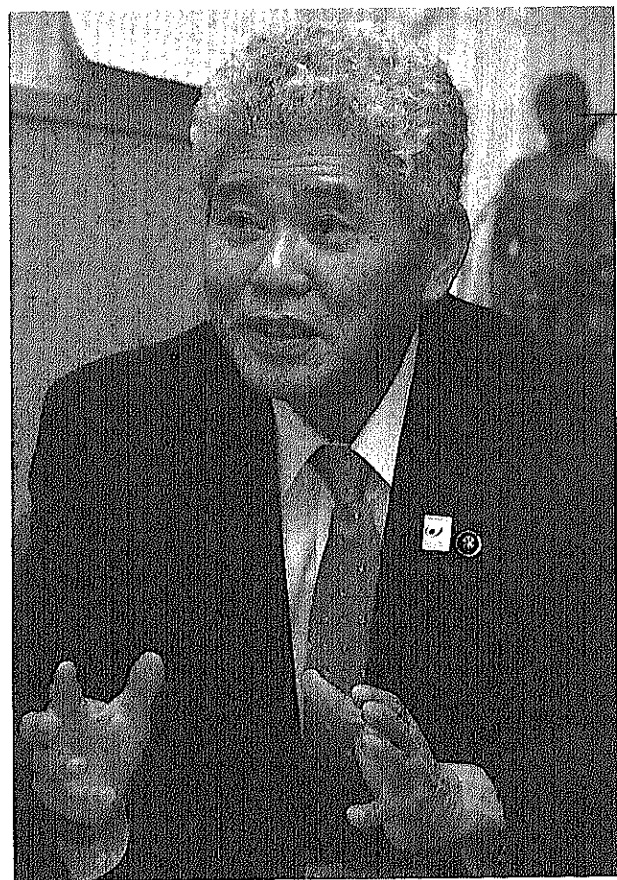
アザド はい、ふるさとです。

■思い出やエピソード

司会 今、それぞれのお立場で、訓練所とかかわるキッカケをお話しいただいたわけですが、以来、平成16年まで、いろいろな形で支援を頂いてきています。その中で、例えばですね、脳裏に焼きついて忘れることのできない思い出があれば、いい例でも悪い例でも構いませんので、お話いただけますか。いかがでしょうか、市長さん。

●二本松市と友好都市提携

市長 はい、昭和63年1月に私は市長に就任したんですが、平成9年にですね、ここの施設の宿泊棟の拡張があったんです。地主さんが東京にいらして、なかなか交渉がうまくいかなかったものですから、私も責任の重さを痛感してですね、なんとしてもこの用地の確保をしなければと一生懸命頑張りました。まあ、お蔭様でご理解いただき、ご協力を頂きまして、調印が行われた時には本当に感無量でした。それからもう1つは、二本松市が当時大河内鷹という市長さんだったんですが、ご一緒にアフリカのタンザニアとマラウイに現地視察、隊員の激励に行ったんです。まあ、アフリカの中でも大変厳し



中原正純

Nakahara Masazumi

1940年駒ヶ根市生まれ。71年駒ヶ根市議会議員に当選。88年より現在まで駒ヶ根市長を勤める。99年法務大臣表彰。現在、「駒ヶ根協力隊を育てる会」の会長であり、協力隊の応援団長として今に至る。

い国を旅行しまして、隊員の皆さんが、本当に懸命な努力をしておる、真摯な態度で頑張っている姿を目の当たりにしてですね、なんか日本の誇りということを感じたんですね。駒ヶ根には協力隊を育てる会があり、JC（青年会議所）に中心的な役割を担っていただいていますし、ロータリークラブやライオンズクラブやあらゆる市民や団体の皆さんにもご協力いただいています。こういう人たちにも、隊員が頑張っている現地へ激励ツアーに行っていたら、肌で感じ取ってもらって心底応援団になってほしいですね。

司会 駒ヶ根市は、色々な都市と友好都市提携と言うんですか、結ばれていますね。磐田市を始めポカラ市あるいは二本松市とですね、提携に周囲の反対はなかったのでしょうか。

市長 (笑) まあ、率直に申し上げて、議会の中にもいろいろな考え方の方がいました。それから、市民の中にもそういう声はありました。しかし、私は、やはり青年海外協力隊訓練所が駒ヶ根に所在するということが、市民共通の財産なんだ、隊員を通じて、途上国の皆さんとともに、地域づくり国づくりをしていくという精神というものが大事なんだというようなこと

を力説いたしました。特にネパールのポカラ市との友好姉妹都市提携に結びつけたのですけれども、やっぱり市民の中には、欧米というか、海外と姉妹都市を結ぶのなら先進諸国とやるべきだという声はかなりありました。しかし私は、今、欧米を含めて先進国へは、あらゆる機会に行こうと思えばいける時代じゃないか、今、世界に求められておるものを市民一人一人が読み取って、日本が果たせる役割を、そういうことを通じて日本を見直し、日本人の心、文化、歴史、伝統を新たに作っていくうえで必要でないか、そういう国と付き合うということの意義というものを絶対分かってほしいと議会にも、市民のみなさんにも力説してポカラ市との友好姉妹都市提携を結ぶに至りました。特にネパールでは観光収入がすごく大きいわけで、その中で、ポカラ市はネパールを代表する山岳観光都市で、そういうところで駒ヶ根市と共通項があるんじゃないかと。その後、ある程度議会の理解が進んできた中で藤田公郎JICA元総裁が「駒ヶ根市と二本松市はお互いに訓練所があるまちとして、将来にわたって友好姉妹都市提携を結んだらどうでしょう」と、こういうご提案を頂いて、仲介役をして頂いてですね、藤田元総裁の仲人で、友好都市提携ができた。その時のほうが、議会や市民の抵抗はなかったですね。

司会 そういう意味で大変なご尽力を頂いて訓練所の支援につなげていただいています。最初にお話しのあった、開所式で法眼元総裁と会ったときにお感じになられた文化的ショックが、ある意味では困難を乗り越える原動力になったと、言ってもよろしいのでしょうか。

市長 はい、そうですね。

司会 ところで、高坂先生については、それこそ先ほどのお話しにもありましたように、体験入隊であったり、学校交流もありましたけれど

も、そんなご経験の中で、心に残るものはありますでしょうか。

●ネパール研修制度、学校交流、 中学生体験入隊の始まり

高坂 今、市長さんのお話を聞いとりながらね、私が、国際理解教育という立場からこの協力隊訓練所とどう関わっていくべきかを一番考えていたわけですけど、実は平成3年に、当時AET・Assistant English Teacherという制度で、メアリーというアメリカオクラホマ出身の女性の先生が来てたんですが、2年終わって帰るときに、是非自分の郷里へ駒ヶ根の中学生を招きたいと、こういう話がありました。市長さんをお願いをして国際化を進めていくにはどうしても子供たちにそういう研修をさせる必要があると、なんとかお願いしたいということで、中学生の海外研修制度を作っていただいた。そして、3年間はアメリカへ行きました。しかし、行ってみたら、なんか東京のようで、子供たちが修学旅行に行っているような(笑)、まあ、たしかにね、大地の広さとか、そういうものは違うけれども、東京と変わらない。帰ってきてから本当に悩み考えました。協力隊訓練所がせっかくここにあるのに、なんでアメリカなんだと考えましてね、それで、ここの所長さんに、平成6年だったですかね、どうしても協力隊員が活動している国へ、中学生を研修に出したいというお話をしたんです。そしたら、治安の問題と、それから隊員の活動の状況と、帰ってきた隊員の支援なんかを考えるとネパールがいいんじゃないのかなと、こういうお話があったんです。しかし、さて考えてみたところがね、僕がそこに下見に行くわけにはいかないし。

市長 それは、さっき言った半田くんがキッカケになったわけだね。

高坂 そう、それでね、北原君が委員会をされとったJCの連中に声かけてね、「お前さんたち、こういうことを考えているから、ついちゃあ、下見にいつてくれ」と(笑)、そしたら、なんで俺たちが下見に行くんだなんて話があったがね。今の話のキッカケになったのが半田好男君なんですよ。これが、栃木県の高校の先生で、理数科の教師でネパールに行ってたんだ。行っている間に、理数科の教師をしながら識字教育も行ってた。そして、帰ってきてから、その

識字教室の支援を本人自身がやりたいということで、小さなハートプロジェクトの話になった。それから、例えばスリランカへ行く隊員がいるといたら、スリランカについて子供達も調べてみよう。そういうことを通して、子供達が発展途上国の勉強を自らするようになる、そういう機会にもなるだろうと。こういうことで、学校交流というものを始めたんです。これは、学校の行事の中に組み込んでいくものですからね、先生の意識の違い等、非常に難しい問題があったんですけども、今もそれが続けられておるといのは、大変ありがたいことだなと思っております。この学校交流が平成7年の1次隊の訓練から始まりました。

市長 それと、JCが中心になって行った活動があったじゃない、中学生の体験入隊。

高坂 そいつが15年前。

市長 面白いことに、駒ヶ根市から15名、既に協力隊に入っている。その中にはね、面談してみるとやっぱり体験入隊がキッカケとしてというのが多い。

アザド それとね、訓練生が学校交流会で同じ学校に毎回行ってるじゃない、例えば、バンングラデシュの話して、訓練生が帰ってきて言うんですよ「私が子供達に教えるより、子供達もって知っていたよ」と(笑)。

窪田 子供達よく勉強しているからね。

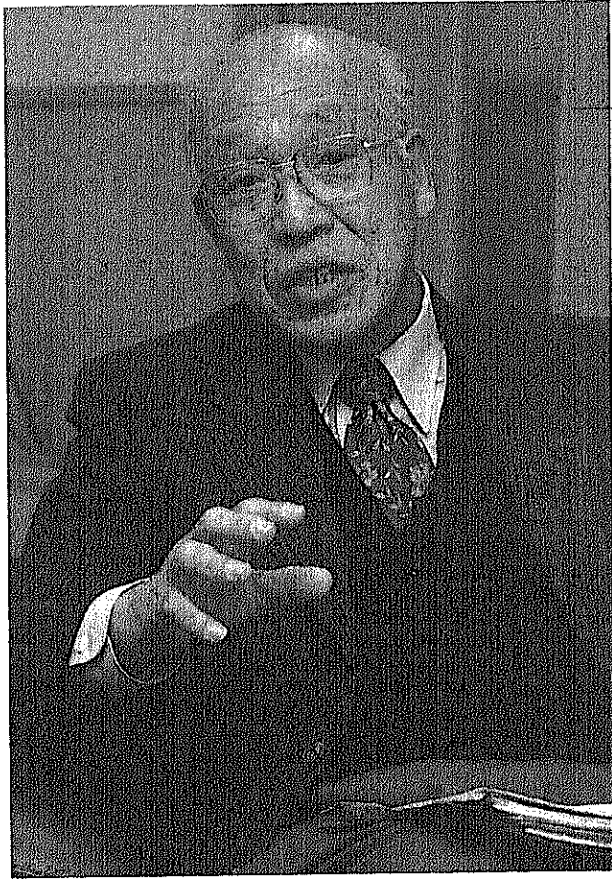
アザド 子供達にとって年に3回訓練生がきてるから、だいたい、調べていく内容はどこか似てますよね。子供達みんな話すことだいたい知ってるから、「知ってるよ、知ってるよ」って(笑)。

市長 親がね、喜んでくれていて。それだけ、理解ができているのでしょね。

高坂 しかし、訓練所がここになけりゃ、そんな意識にはならないかもね。

北原 僕も中学生つれて一回ネパール行ったんですよ。おもしろいなと思ったのが、中学生の子供達は、最初に勉強会始めるじゃないですか。何ヶ月も前から始めるんですよ。で、最初はみんなチャランポランなこと言っているんですよ。でも、あれ行って、色々なもの見て帰ってくると、全然違うんですよ。あれは、凄いですよ、成長したというのを目の当たりにするんですよ。

高坂 それで、学校交流でね、訓練所のほうで今後、もう少しこうしてほしいと思うことがあ



高坂 保

Kousaka Tamotyu

1929年飯島町生まれ。49年より40年間長野県内各地で義務教育に携わる。88年より10年間駒ヶ根市教育長。93年より現在まで、「駒ヶ根協力隊を育てる会」の理事。96年より8年間駒ヶ根訓練所カウンセラーを勤める。隊員候補生が市内の小中学校を訪れる「学校交流」などを始め、訓練所と教育機関を繋ぐ活動を行っている。

おっしゃった、3つの交流に近い形が赤穂南小学校で実現されつつあるのではないかと思います。

北原 OBOGの話ですけど、本当によく考えないともったいないと思いますね。

アザド そう、みんな帰ってきてピリオドになってるような。

北原 そうなんです、僕もそんな気がしてる。アザド 始まりはすごくいい、途中もO.K、最後になってなにか壁ができてくるような。

北原 僕らも青年会議所の中で、協力隊やOBOGのことに重点をおいて考えるんですけど、なかなか難しいというのが実感です。OBOGたちもそれなりに自分たちの生活があるというか、やりたいこともあって、こっちが思うようには動いてくれないということもあるし。経験がいかされないんですよ。

高坂 生かしてあげられるようにすることも大事だね。

司会 思い出に残るといふところにもどしていただいて、「トカルパの光」についても高坂さんにだいぶお話しいただいたんですが、その会長である窪田さん、今でも思い出に残るようなことがございましたらお願いします。

●市民に広がる国際貢献運動

窪田 いや、いっぱいありすぎて(笑) やっぱ、小さな国際貢献運動で支援したプロジェクトの応援に現地に行ったことですね。マレーシアのクチンでは、久野研二隊員の「障害児におもちゃ図書館」を視察し、スクールの中「若い力」を現地隊員と一緒に大合唱したり、宮沢栄隊員はシンガポールからマレー鉄道で上り、マ

るんだけど、3つのことを考えました。まず、訓練をしている間の交流、行つとる間の学校との交流、それから、帰ってきたときの交流。この三つを1つのセットにして考えてほしい。訓練中の交流は自然にできるんだけど、行つとる間の交流というのが実はね、なかなか難しい。あの、大変嬉しいことはね、例えばこういう『グアテマラ便り』といってね、グアテマラに派遣された隊員が六十何通よこしてるんです。市長 これは、インターネットで送ってくるの。高坂 メールでよこしてくる。で、学校にも送ってきて、交流を行つとる。それから、所外活動に出ているあのおじさんたちやおばさんたちが、向こうから来る手紙を宝のようにしてるんです。行くと必ず嬉しそうに見せてくれる。こういうことを是非隊員に続けて欲しいと、そういう話を訓練カウンセラーやっている間に毎回話しをしたわけです。これが続いていくということがね、学校にとってもいいことなんじゃないかなと。

司会 これは学校交流からの繋がりだと思いますが、赤穂南小学校が、世界情報センターというものをJICAと協力してつくって、もうじき正式オープンします。これは、先ほど高坂先生が

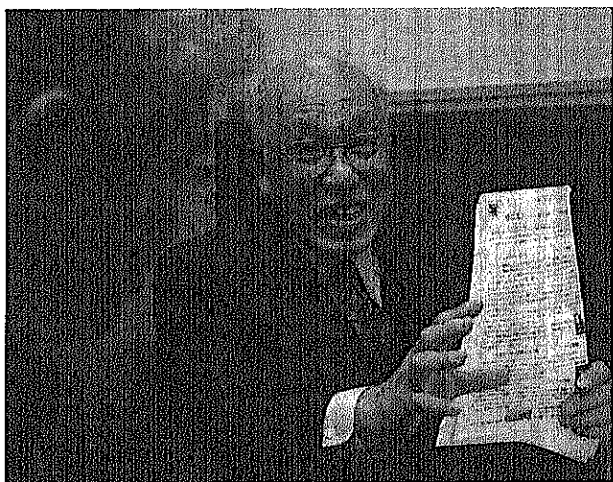
ラッカ州ラムアンチナ村「入植者のミニ図書館」を視察に、市長や市民といっしょに行きました。やはり現地に行って隊員の生活や活動を見たことが一番思い出に残り感動的でした。

また、「トカルバのひかり」の支援の輪がだんだんと広がっていく過程が非常に思い出に残っています。半田先生の帰国報告や識字教室の写真に感動させられて、募金の輪が徐々に広がっていきました。中学生が文化祭で自分達が中心になり募金を呼びかけてくれました。郵便局では各地で報告会を開催してくれました。そして、国際ボランティア貯金の配分も5年間連続で頂きました。市民の中で難しい発音である「トカルバ」の言葉が広がっていきました。

また、女性の識字教室だから女性が行こう！と家庭の主婦1名と一緒にトカルバ村に行きました。これが報告書ですが、これは一番感激しました。

司会 先ほど高坂先生からもお話がありましたけれども、中学生の研修等、恩師からそういうことを言われて、プレッシャーを感じられたかもしれないし、なんでワシがこんなことせないかんのかなと、そんなふうには思いませんでしたか。

窪田 あの頃は、こっちもいろいろ頼んでいたものですから(笑)。Yesとハイ、ですから(笑)。あの、ムードはうんと良かったんですね。その時に、みんなでやろうと感じたので、やらされるとかそんなこと思っていないですよ。さあ行くぞと、あの頃はどんどんやれ、それ行けと。周りも協力隊を応援してくれたりだとか、市民を応援してくれたりだとかで始まって。行かされた人は可愛そうだったかもしれないですけど(笑)。



司会 あの、北原さんと言うと協力隊週間を思い浮かべるんですけど、それには限定せずに、これはというものがあれば。

●「知っている」から「理解する」を目指して

北原 一番思い出深いのは協力隊広場とか、協力隊週間を盛り上げた年のことです。僕が平成10年に国際化の委員長ってのを青年会議所の中で仰せつかって、じゃあ、なにをやるんだ、20年目だぞ、なにを大きく取り上げるのか。その時に我々の頭の中にはすでにOBOGの存在があったんですね。ここで訓練を受けている候補生達といくら交流をしたくてもなかなかできにくい。だからいろいろ勘案すると、OBOGが一番我々として付き合いやすいし、経験もあるし、やる気もあるだろうというところで、彼らを20周年の集いの一番の主演にしよう。それで、何人集めるんだという話になって、理事会でね、中途半端な数を言ってえらく怒られたものだから、じゃあ僕は3,000人集めますって言っちゃったんですよ。OBOGもあの時点で9,000人くらい駒ヶ根から出てましたので、1/3くらい集めるって言っちゃったんですよ。それは後で考えたら大変なことだと分かった。東京で育てる会の総会があると聞けばとんで行って、みんなに案内を配るわけですよ。日付だけは決めてもらって内容なんかなにも決まってないのにパンフレットだけ適当につくって配り歩くんですよ。そういうところで恥も外聞もなく配って。もう、やれる手は全部やったと思いましたね。そしてその年の国際広場になったんですけど、国際広場自体は平成6年から始まったんですね。

窪田 その前に「駒ヶ根ネットワーク」というのを平成4年に最初やったことがあったんですよ。

北原 そう、種はあったんですよ。国際広場という名前になったのがどうも平成6年から。私は平成10年でした。当初は協力隊のことを知ってもらうことが一番の目的だったのが、その頃には大体が知っているからさらに理解を深めてもらおうと、OBOGが日本一集まる町だというような形でやったんですね。それは、今みたいに2・3日週末だけやるのではなくて、昔の資料もっているんですが、8月1日～8月9日までですね。9日間4市町村で、OBたちの話と各国の料理教室を一回づつやってもらって、オ



窪田雅則

Kubota Masanori

1953年駒ヶ根市生まれ。92年駒ヶ根青年会議所理事長を務める。現在、窪田建設株式会社の代表取締役であり、93年に設立された、ネパールボカラ市の支援活動を行う「NPO法人トカルバのひかり」の会長として、市民の国際貢献運動に活躍している。

訓練所20年の集い—という名前になったんですよ。だから、あの頃はJCとして最初動き始めたんだけど、どんどん大きくなってきますよね。手に負えなくなってきたと思っちゃいましたけど、でも、そういう流れがあって千何人も来たという、そのときの広がりというのが僕は面白かったなあと思います。

司会 それだけ力を入れていただいて、酒造会社のご商売に影響でませんでしたか。

北原 いや、あんな時は商売なんてやっていたりできないですよ（笑）。冬の間は僕、酒蔵こもってましたけど。時期的に良かったかもしれません。

司会 アザド先生いかがですかね。

●「Bangladeshってどこ？」の 駒ヶ根市民が国際化

アザド 皆さんの話を聞くと、私は外から来るから、だいたい何処行ってもね、「何処の人ですか」って聞かれるんですね。町の何処に行っても外国人ですから。一番最初に駒ヶ根に来たとき、東京で生まれた6ヶ月の子供をこっち連れてきたんですね。こっちにきたら今の澤田マンション、その当時駒ヶ根で一番の高層ビルだったんじゃないかな（笑）。私は東京から移ってきて2番目の人でした。その当時の西友、今のアップルランドと農協の二つしか店はなかったね（笑）。アパートで洗濯物を干しているときは、歩いている人が何着てるかなとこちらを見てるんですよ。その時「どこの人ですか」と聞かれ、Bangladeshの説明をしたら分かってもらい、家の中に入ってもらって一緒にお茶を飲んだときに駒ヶ根市民との初めての交流で、その時初めて壁が取れたようで、これが一番嬉しかったですね。

ユンナのコンサートだとか、舛添要一さんの講演会とか、アローナのコンサートとか色々やって、結局1,300人くらいOBOGと関係者が来てくれたんですね。で、私は広場の上のビルの上から代表で記念写真撮ったんですよ。あれを見たときに僕は一番嬉しかったなあ（笑）。やっぜというようなね。でも、やっぱりあの年から、ワールドレストランという、今ではアザド先生が作ってくれるカレーが定番になってますけど、ワールドレストランからOBOGの帰国報告会とかして、非常に大きなお祭りになっちゃった。これは、少し話がずれちゃいますが、平成10年の頃というのはまだJICAさんは、そう積極的に出てきてくれていなかったんですよ。やってはくれましたけれども、僕らが20周年の集いをやるということに関しては、青年会議所としてやるという決め方だったんですよ。で、協力隊さんからの支援は受けない、青年会議所の合意した事業としてやるということだったんですね。でも、あまりに動きがあげさだったというか、大きかったんで、JICAとしても動いていただけの形になり、そのうちに県まで話しにのってきて、長野県という冠までついて「長野県国際協力キャンペーン」—駒ヶ根青年海外協力隊

言葉知らないし、回りのなにも知らないしね。それからいろいろな交流をしました。いい経験をいっぱいしました。どれが一番いいと言われるとちょっと困ってしまいます(笑)。私は、日本人には山と海が一番合うと思いますね。でも、バングラデシュには山がありませんから、最初、山になにの楽しみがあるか分かりませんでしたね。でも、今は日本人と同じになってしまいました。だから、ここから離れたらどうやって生きていけるんでしょうね(笑)。それが、この長年の結果の1つですね。

司会 先生ご自身がそういう体験をされてきましたけれども、25年前に比べて、先生方の努力とか市の努力によって、市民の皆さんの国際交流や国際協力に対する考えみたいなものは変わってきているのでしょうか。

アザド 変わってきていると思いますね。最初私たちが来たときは、国の名前もほとんど知らないし、どんな言葉をしゃべるかも知らない、その中で、私たち市民になりましたね。今はいろいろなイベントがありますけれど、昔はなかったですね。私の子供が南幼稚園に通って、そこが一番市民と深い交流をもてたと思いますね。例えば、我が家の場合は豚肉食べないんですよ。でも、幼稚園は給食ですからみんな同じもの食べるんですよ。そこで、先生たちに相談したりして、一ヶ月分の献立表をもらっていたんですね。だから、豚肉の日は家から子供に弁当もたせたりして、それを周りのみんなが見ていたんですね。そういう中でいろいろな話があったんです。例えば、なぜ、一人だけ違うのか。PTAでも育て方の話とかあって、自分でもいろいろと勉強になりましたね。そして、家で作ったお菓子を幼稚園で出してみたり、カレーを作ってみたりしました。特に担任の先生が東南アジアに凄く興味を持っていて、私の家に遊びに来たりしたこともありました。その頃から、私は国際化が始まっていると感じましたね。最初は多くの方がバングラデシュの名前も知らなかった。でも最近、南小学校に候補生が行ってバングラデシュの話だとか、いろいろなお菓子を持っていったりします。でも、生徒たちは候補生より知っていますね。それが私にとってもとても嬉しく思います。最初は誰も知らなかった国だけでも段々と皆さん知ってきたように、国際化も徐々に広がってきたのだと思いますね。最近、いろいろな学生が訓練所の授業

を見に来たりするじゃない。あと、私の教え子の中で何人か長野県の学校の先生がいるんですね。その中で何人かが自分の生徒を訓練所に連れて来て見学したり体験入隊したことが数回ありました。ですから、国際化は駒ヶ根を中心に徐々に周囲にも広がっているように思いますね。**高坂** 今のね、国際化の意識というものについて、私が小学校の校長や教育長をしているときに、2~3回外国人の父兄の方が来られてこういう話をしたのを思い出しました。スーパーマーケットなんかで買い物をしているとね、なにか盗んでいくんじゃないかというような目つきで見える人がおる、私の心がそういうふうに見てしまうのかわかりませんが、というようなことを訴えていったお母さんが何人かいた。その時に、これは国際理解教育をしなければいけないと痛切に感じてね、これに力を入れ始めていったんですよね。最近は、ほとんどそういう話は聞かなくなったがね。

アザド 私はね、たくさん教え子の結婚式に出席してね、下手な日本語でスピーチしたりだとかたくさん経験していますね。すごく嬉しくなるのはね、ドレスを2~3回変えたりするじゃないですか、その中でね、一回は必ずサリーを着ますね。一度はね、3回チェンジがあって、3回ともサリーでした。そういう結婚式もありました。それは、とても感動しました。

■地域により開かれた 訓練所となるために

司会 お話はつきませんが最後に、「訓練所はこうあってほしい」とか、「こういうことは続けなければいけないし、こういうことをもっとやらなければ、地域から見放されてしまうよ」と、そういうものがもしありましたら、是非お伺いしたいのですが、市長さんいかがでしょう。

●駒ヶ根市民は応援団！ 訓練所と地域との連携を大事に！

市長 駒ヶ根市の職員をボランティア調整員として派遣するという事で、現職参加に踏み切りました。平成10年9月から中村君、米山君、現在、林君と三代続いています。これはやっぱ



北原岳志

Kitahara Takeshi

1964年駒ヶ根市生まれ。92年駒ヶ根青年会議所入会。98年国際化委員長、この年に「駒ヶ根青年海外協力隊訓練所開所20年目の集い」開催。その後も奥様とともに協力隊週間・ワールドレストラン等地域の国際理解運動を精力的に応援・実践している。

現在、酒造株式会社長生社の専務取締役・杜氏。

島町では今、JICAと一緒にパキスタンからリンゴ栽培の研修員を受入れてもらっています。

市長 そういうことは大事にしてほしい。やっぱりね、OBOGを含めて、第二の故郷として、ここを意識していただけるような展開をお願いしたいと思います。まあ、いずれにしても、協力隊週間や国際広場等々、ネパール交流市民の会もせっかくできて活動をしているわけですから、目覚めた意識と作られた組織と、そして、これからやろうというパワーを引き出すために、訓練所が市や市民とのパイプ役になってもらってですね、地域で盛り上がっていただけるようお願いしたいというふうに思いますね。

司会 隊員が帰国した後の地域とのつながりについて、高坂先生が何かアイデアをお持ちとか。

高坂 私も一番大事なところはそこではないかと思っております。帰国隊員の就職問題とも関わって、帰国隊員の活動支援を地域としてやっていけないかと考えている訳です。例えば、農業隊員とか、村落開発普及員、保健医療隊員、教育関係隊員が協力し合って地域の農業支援や医療保健関係の施設支援、福祉施設のお手伝いをしてもらうことの出来るような組織作りをしたらどうか。私がセネガルの隊員活動を視察した時、看護師と植林隊員と野菜隊員が同じ地域の学校で衛生教育をしたり校庭に木を植え環境を整えたり、その木の下で野菜隊員が作った野菜を使って給食を作ると言うプロジェクトを作って活動している様子を見てね、正にこれは地域作りだと感動しちゃってね。帰国隊員のOB・OGはこんな力を持つてるんだから、自分達でそういう組織を作ってもらい、地域としても空家などの宿泊施設を提供するとか、所外活動先

りさきほど言ったように、協力隊の所在する都市の職員自身がまず意識を高めるということが大事なんだと思い、決断をしたんです。これからは是非大事にしてほしいことは、所外活動での地域との連携です。やっぱり訓練所の最重要課題として、是非、地域との繋がりというものを今後ともやっていっていただきたい。本当、心底応援団ですよ。地域と訓練所や候補生とのつながりを大事にしてほしいですね。また、ODAを含めて住民が意識に燃えて、途上国と協力関係の中で何か寄与したい、協力したい、貢献したいとか、そういう、プロジェクトをですね、やはり国家的に援助、フォローしていただく、支援をしていただくとかがこれからは大事だと思いますね。訓練所を通しての国際協力というだけではなくて、訓練所を柱として、伊南地域という形で、住民がこんなことをしたいと言ったときに、ODAを含めてですね、JICAとしてちょっとした支援をしていただくような政策をこれからも考えていってほしいなと思います。なんかそういうものがあると、「それを取り込んでやろうよ」とそういうふうになってくるんだと思いますね。

司会 今の二つ目のお話については、お隣の飯

と連絡をとるなど「協力隊を育てる会」や地域の有志が後押しをするとよいと思います。私も大いに後押ししたいね。こうすることによって、帰国隊員が持てる力を地域づくりに役立てることもできるし、駒ヶ根市や伊南地域の発展にもつながると思っています。

司会 これは帰国した隊員の意思というものもあるかもしれませんが、そういう意思を持った帰国隊員が集まれば、市や市民の皆さんのご協力をいただけるかも知れませんね。

高坂 はい、所外活動の農家だってきっと、忙しい時に手伝ってくれたら嬉しいじゃないかな。これは、OBにも是非一緒に考えてもらわなければいけないんじゃないかなと思いますね。

司会 他に先生のお立場から、今後の訓練所に望むこと等ありますでしょうか。

●訓練所はもっとPRを！

高坂 はい、訓練所は地域の宝と言っておりますが、訓練所でどんなことをしているのかを知っている市民はまだまだ少ないと思いますよ。独立行政法人化してから訓練所自身も外部との交流を積極的に進めていこうとする姿勢を強く感じて嬉しく思っております。その意味で、地域の老人クラブ、生涯学習グループなど、いろんな組織の方々に施設を開放して、空いているときは会合の場所として使ってもらい施設見学などしてもらったらよいと思います。それからJICAの隊員活動現場視察ですが、市としても訓練所としても、もっと一般の方々への参加を積極的に働きかけて、隊員の活動にじかに触れてもらうことを通して、世界に目を向けたり、小さなハートプロジェクト支援につなげて行くことが大切だと思っております。市としても支援できないかなあ？更に、「協力隊を育てる会」の活動についても、もっと市の国際化という視点や、活動の日常化という視点で考える必要があるんじゃないかと思っております。例えば、協力隊週間というもの「駒ヶ根インターナショナルフェスティバル」とでも銘打って。留学生や企業で働く外国人の方々にも参加してもらって広めていったらいいんじゃないか、これからの駒ヶ根市の国際化を進めていくうえで大事なことだと思います。

司会 別の観点から窪田さんいかがでしょう。

●市民と一緒にやって行う、 長く続くボランティア

窪田 私は高坂先生と違った観点からですが、キーワードは「ライフワーク、ボランティア、小さなハートプロジェクト」です。長くやっていかなければならないと思います。

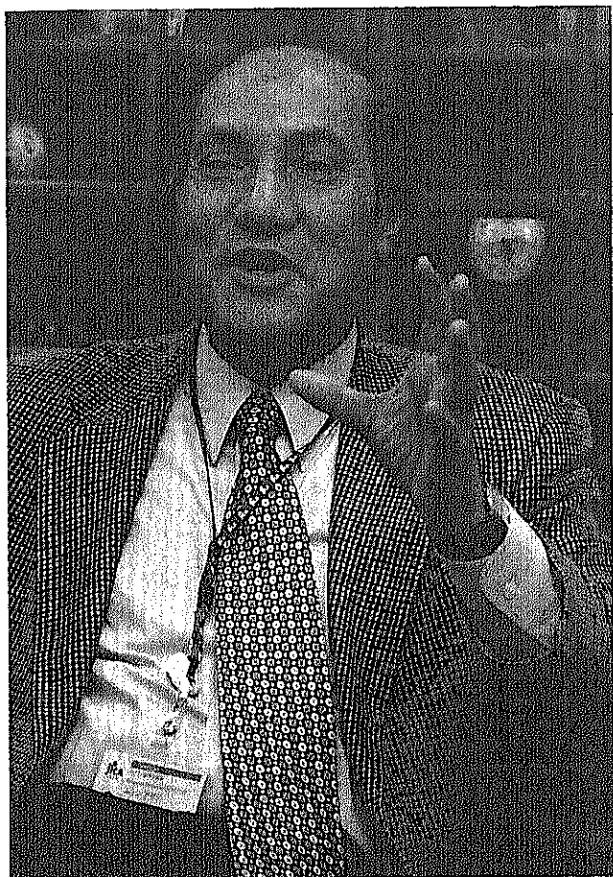
駒ヶ根市民が、あまり重荷にならない様に、自分でできる範囲の募金で参加した小さなハートプロジェクト。その活動がどんな場所でどんな人たちが、どんなふうに行っているのかその場所に見に行く。現地視察を数人の市民グループ、若い女性も、家庭の主婦も、高齢者も行くことが駒ヶ根市民はできるのです。素晴らしい国際貢献だと思います。

また帰国した隊員は、ボランティアで、自分の経験を生かしてその視察旅行にも参加してもらおう。現地に行くことが最高です。

高坂 いいねえ。この間ね、私が最初に教えた生徒たちが70歳になるんだよ（笑）。その同級会をやったの。そこで、先生は協力隊の何かをやっているようだけれどもという話になって、この間の津波のスリランカにもマレーシアにも行ったと話したら、そういうところで何かできるんじゃないか。「先生、一声かけな、オラたちは協力するぞ」という話になった。阪神大震災以後、ボランティアの意識というのはうんと増えてきているからね、石をうまく投げてやればいいよね。その石をだれがどうやって投げののかというのが非常に大事なんじゃないですかね。そういうところへ、僕なんかも関わっていただけらと思っておりますね。

司会 最近、石を投げる人はだいぶ多くなってきたと思いますけどね、誰が投げてもいいという問題ではなくて、やっぱり投げる人というのはそれなりに上手に投げて波紋を拡げられる人じゃないといけないと思うんですね。今ちょっと、色々な石が投げられすぎて、池の中でいろいろな輪がぶつかって、消えちゃう輪も出てきてしまっている。そんな印象ですが。

窪田 我々も近いことを言われたんですけども、どんどん石を投げる人たちはいますよ。彼らはお金だけやって学校つくって、それだけじゃダメだよと活動を通して教えられました。協力隊は釣った魚をやるんじゃなくて、魚の釣り



ムンシ・アザド

Munshi Khalilullah Azad

1945年バングラデシュ人民共和国クティア市生まれ。大学時代、一年間日本へ留学し商業を学ぶ。大学卒業後、74年再び訪日し、NHKベンガル語国際ラジオ講座で翻訳の仕事などをする傍ら、アジアアフリカ言語学院にて日本語を履修。75年より青年海外協力隊広尾訓練所にてベンガル語講師として勤務。79年駒ヶ根訓練所の開設時から駒ヶ根訓練所の語学講師として候補生の語学指導を行い、途中二年間、福島県二本松市の協力隊訓練所に移るも現在に至る。

ッと霧散してしまうようなことが否めないのも、そういうOBOGたちに何をしてもらったらいいのかなということを考えるんですけど、今日的な話題がいろいろ出ていますよね。街づくりという観点から言ったら、街を活性化させるといだけの意味ではなくて、持続可能だとか、環境問題だとか、スローライフだとか、エコツーリズムだとかいろいろ切り口があって、それは、なんて言うか、行き過ぎた物質社会への警鐘みたいなものかもしれないですけども。そういうところが実は日本は先進国ではないのではないかと僕は思っていて、逆に、俗に言う途上国の人々に教えてもらうことがあるんじゃないかなあと思いますね。そういうところを持って帰ってきているのはOBOGだろうから逆に僕らに戻ってきてから教えてくれる。だから、隊員が帰ってきた時点では仕事半分じゃないかなと僕は思っていて、OBOGをどう活かすか、どう街づくりにつなげていくかということを考えていかなければと思っています。それと、もう一点望むこととして、市民と訓練所の繋がりと云えば、やはり昔から比べればうんと認知度は上がったし、意識は高くなってきていると思うけれども、高坂先生おっしゃるように、まだまだと言う部分もそこら中に散見されるんですよ。なので、この地域の特色にするということから言えば、ここに協力隊訓練所があるだけではダメなんですよ。ここにあることで周りの市民が協力隊精神を持っているような、そういう街になった時に、ようやく協力隊訓練所というのはこの地域の魅力になると思うんですよ。そういう、市民への啓蒙というか、ここは、人づくりのプロなんだから、ある意味で隊員た

方を教えてやるんじゃないかと。そういうことで、ハートプロジェクトで投げられた石の波に市民を巻き込んでいってそれに興味がある人たちが、何人かお母さんやシニアの人たちが現地に行ってくるとかそんなような感じで。

司会 そうですね。

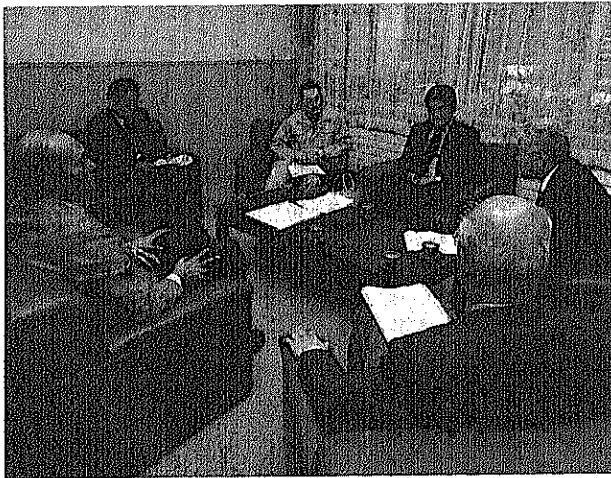
窪田 我々が投げれば、そのコツだけは教えていただけるし方法もあるんで、そこらへん我々の事業は本当にいい事業だなと思っているんですけども。

司会 北原さんはいかがですか。

●市民も育てる訓練所へ

北原 はい、望むことということで、2点くらいかなと思います。1点は先ほど出たOBOGのことですよ。僕ら街づくりという立場から見ている人間からすれば、OBOGに望むことは結局は協力隊経験の地域への還元を一番望みたいわけですよ。しかし、その仕組みが出来ていない。さっきもアザド先生がおっしゃったように、訓練中は手厚く、向こうへ行ったら隊員の時も守ってくれて、帰ってきたときにはどうもパ

ちだけを育てるのではなくて、周りの市民も育てるというような見方というのをさせていただけるといいのかなと思ったりもします。今は地方の時代とも言われるし、国際化の時代でもあって、昔なら、きっとネパールのなんとかるところと交渉しようと思ったら、日本国とネパール国でやりあうと思うんですよ。でも今は駒ヶ根市とポカラ市でも直にそういう繋がりができるということです。この時代に地方から国際化が進んでいくという意義があると思うので、そういうところの窓口になっていただければなあというふうに思います。それから、やっぱり皆さんおっしゃるようになっていくというのは大きいと思いますよね。青年会議所の活動の中にもGTSというのがあって、Global Training Schoolという、途上国と言われるところにいって活動するんですよ。学校作ったりだとか、道路舗装したりだとか。そういうことをやって帰ってくるという、観光は何にもなしのプログラムがあるんですけども。そういうものの駒ヶ根版みたいなものがあれば、それこそ、さっきおっしゃったように、見るだけではなくてやってみるということを加えれば大きいかなと思いますね。で、そういうようなプログラムをだれか立ち上げないかなと思っているんです(笑)。皆さん同じことをおっしゃっているので、そのうち誰かやってくれんじゃないかなと言うような感じを今日うけました。あと、先ほど高坂先生もおっしゃったように、「国際協力を日本の文化に」と緒方貞子さんがおっしゃっていましたが、文化というのは辞書的な意味で言えば、人間の精神が創り出したものだと思うところがあると思うんです。これからの新しい文化というのは、ボランティア精神がつくるのではないかなと思ったりします。協力隊なり



OBOGが活躍できる場というのがウンとあるので、そのへんを一緒にやっていきたいと思えますね。

司会 今までは地域の方々が地域のことを考えて、訓練所に対する要望なりをお話いただきましたが、30年以上日本に滞在して、最初に来られたときには大変な思いをされたご経験をお持ちのアザド先生。異なる気候であるとかそれこそ文化ですね、コツ、どういうことをしたらうまく慣れることができるのでしょうか。

●真の国際交流は、言葉だけでなく、文化、習慣、食べ方まで

アザド それは、それぞれ家の育て方があると思いますね。例えば私の育て方、日本の育て方、同じじゃない。似ているところもありますし、似ていないところもありますね。例えばバングラデシュで子供を育てるとき家のことは決まっているんですね。どうやって食べるとか、日本だったら箸の持ち方だとかね。PTAの会議であるお母さんがね、家の子供はまだ箸が使えないと言ったんですよ。それはなにか私から見て先生の責任みたいな感じで、それがバングラだったら普通は親が教えるものですね、それは先生から教えるものではないと思う。そういうところが何かいっぱいある。私は、なぜそうなったのか、それを考えたいですね。日本の昔を考えると、私から言わせると、五十何年前の日本とバングラデシュはあまり変わらないと思っているんですね。私たちの家族のパターン、例えば、おじいさんが家族の一番メインでいて、何をしているかをおじいさんに全部報告するとかね。日本は段々と経済発展して、今はお母さんも仕事をしているんですね。だから子供を保育園に行かしたりだとか、そういう家庭が増えてきているんですね。そうすると、親が自分で教えたいと思っても教える暇がないですね。特に、ここはまだいいけれど、東京だと一時間半くらい通勤して、みんな子供をあまり見ていないですね。帰るときも遅いですし、出るときも早いですし。子供との交流はあまりないですね。だから、お母さんまで外になってしまったから、全てを学校で習うことになってしまったんだと思いましたね。私が始めて日本にきて日本の家を訪ねたんですね。すると奥さんが来て、旦那さ



【司会】

小宮英夫

Komiya Hideo

1946年千葉市生まれ。69年JICAの前身組織に入団、長らく青年海外協力隊事業に携わる。74年、隊員を主題とした劇映画「アサンテ・サーナ（我が愛しのタンザニア）」（監督・谷口千吉、八千草薫特別出演）の製作に携わる。98年から名古屋、高松で地域と連携する事業に従事。現在、JICA駒ヶ根所長。

すね。だから出発する隊員に一番言いたいことは、バングラデシュを日本人の目から見ると、変に感じてしまうこともあると思う。でも、「それは何故そうなっているのか」、それを勉強しなさいと。その中に自分のためになることが絶対にあると思いますね。そういうものを覚えて自分のためになったら二年間の花が咲くのだと思います。だから人に興味を持たないと国際化はならないと思う。

窪田 我々が最初に勉強したときに、「国際化とは・・・」という定義をしたんです。それは、「人と物と情報と文化が国境を越えて交錯する」。なんで文化があるんだっていうのが分からなかったけれど、やっぱり文化とかそういうのを理解しないと、人と物と情報だけが交流してただけではどうしても越えられないものが文化なんだな。これは末次一郎先生が教えてくれたんです。

司会 最後にいいお話を伺いましたね。異なる文化を知って、異なる文化に学ぶ。お互いに知り合い、お互いに学び合うという姿勢が文化を形成していく。そういう意味からすると、訓練所は、駒ヶ根市あるいは地域の方々がどういうことに関心を持たれているのかを知って、それになるべく近づくようにしなければいけない。また逆に駒ヶ根訓練所はこういうことをやろうとしていますということを皆さんに知ってもらい、皆さんにこの訓練所を大いに利用といただきますか、活用していただく。そうすることで訓練所としてもっと存在意義が出てくるんだろうと思いますし、お役にたてるのではないかとそんなことを最後に強く感じました。今後また何かの機会にこういったお話を伺うことができたらと思います。本日はありがとうございました。

んのことをお父さんと呼ぶ。バングラデシュでは私たち絶対お父さんとは言わないですね。最初はおかしいと思ったんですけど、なぜかみんなに聞いたら素晴らしいことを聞きましたね。子供みんなが呼ぶ呼び方がお父さんだと。それは素晴らしいことと思いました。

私のイメージは日本は変な国ですね。自分の旦那のことをお父さんと呼ぶんですね。でもその裏には素晴らしいことがありますね。それを知りたいという気持ちがないと国際理解にはならないと思います。なぜ、そういうことしているのか、それを知る興味がないとその社会に慣れないし、その人と交流できないのだと思います。バングラデシュでは、手で食べるとか、それは日本では行儀が悪いとかいうけれど、でも、日本でもおにぎりは誰も箸で食べない（笑）。寿司もみんな手で食べるんです。だから、手を日本でも使っているんです。寿司は凄く美味しいですよ。今感じますよ（笑）。だから自分で興味を持たないと、ただ他人としてみているだけでは絶対国際交流にはならないと思う。ここの訓練はバングラで生活するために困らないようにする。私は、言葉だけではなく、文化だとか習慣だとか食べ方も全部大事だと思っているんで

25周年記念事業紹介

駒ヶ根訓練所開設25周年記念式典、講演会、祝賀会

日 時：平成16年5月29日(土)
 場 所：駒ヶ根市総合文化会館大ホール(記念式典、講演会)
 駒ヶ根青年海外協力隊訓練所 森のステージ(祝賀会)
 来 賓：衆議院議員 宮下一郎 氏
 長野県副知事 阿部守一 氏
 駒ヶ根市長 中原正純 氏 他
 記念式典：講演 緒方貞子
 独立行政法人 国際協力機構 理事長
 演題「国際協力を日本の文化に」



多くのご来賓、地域関係者の皆様がご臨席下さった記念式典

中学生体験入隊

日 時：平成16年6月12日(土) 13:00~13日(日) 15:00 (1泊2日)
 場 所：駒ヶ根青年海外協力隊訓練所
 参加人数：35人
 主 催：駒ヶ根青年会議所
 共 催：駒ヶ根青年海外協力隊訓練所
 内 容：従来の伊南地域、静岡県磐田市の中学生に加え、長野県内全県から募集。青年海外協力隊の活動や異文化理解について、様々な体験を通して学ぶ場となった。

25周年記念特別番組制作・放映

日 時：平成16年8月21日(土) 13:30~14:25
 番組名：「地球はひとつ 情熱は海を越えて」
 放送局：(株)テレビ信州
 内 容：長野県出身の隊員・隊員候補生にスポットを当て、派遣前訓練の様とバングラデシュでの隊員活動を取材。

ホームカミングデイin こまがね2004

日 時：平成16年8月20日(金)~22日(日)
 場 所：駒ヶ根青年海外協力隊訓練所
 内 容：全国の青年海外協力隊OB・OGに呼びかけた。久しぶりの同期隊員が集まってみたい、家族でゆっくり過ごしたり、訓練中お世話になった市民との交流を行うパーティーを行ったりと、思い思いに当時は懐かしんでもらえるイベントになった。



パーティーを盛り上げたボリヴィアダンスを踊るOB・OGとその家族



懐かしい同期隊員との交流

駒ヶ根市天竜ふるさとまつりでの花火打ち上げ

- 日 時：平成16年8月28日(土)
 内 容：「天竜ふるさとまつり」は駒ヶ根市で最大の集客を誇るお祭りとなっている。当訓練所としては、25周年を地域に支えられながら迎えることができたことに感謝し、広く県民に訓練所の存在と意義を理解してもらえることを願い10号玉1発打ち上げた。
 花火の名称：「駒ヶ根協力隊訓練所ありがとう25周年」

いなだに国際塾「地球市民講座」の開催

- 日 時：平成16年9月10日(金) 宮田村 村民会館研修室
 (場所) 13日(月) 駒ヶ根市 駅前ビルアルパ3F
 15日(水) 飯島町 文化館中ホール
 29日(水) 中川村 文化センター
 内 容：伊南4市町村にお住まいの中学生以上の方を対象に、長年日本に住み、訓練所で語学の講師をしている先生から日本と彼らの比較等の話を聞き、ゲームを通して国際理解について考えてる機会となった。

ピース・トーク・マラソン 2003-2007 in 長野

- 日 時：平成16年10月2日(土)
 場 所：長野バスターミナル会館
 内 容：国民の平和に対する意識を高め、平和を手に入れるため、保つために国民1人ひとりに何ができるか、日本になにができるかを考える。
 講 師：平田オリザ氏(劇作家)

協力隊週間2004 in こまがね イベント「もう風は吹かない」演劇公演

- 日 時：平成16年10月3日(日)
 場 所：駒ヶ根市文化会館大ホール
 内 容：202X年、架空の青年海外協力隊第四訓練所。この年、日本政府の財政は破綻寸前となり、すべての海外援助活動の停止が決定される。最後の派遣隊員となる青年たちの訓練所生活のその寂しく切ない悲喜劇を通して、人間が人間を助けることの可能性と本質を探る青春群像劇。

協力隊週間2004 in こまがね 国際広場

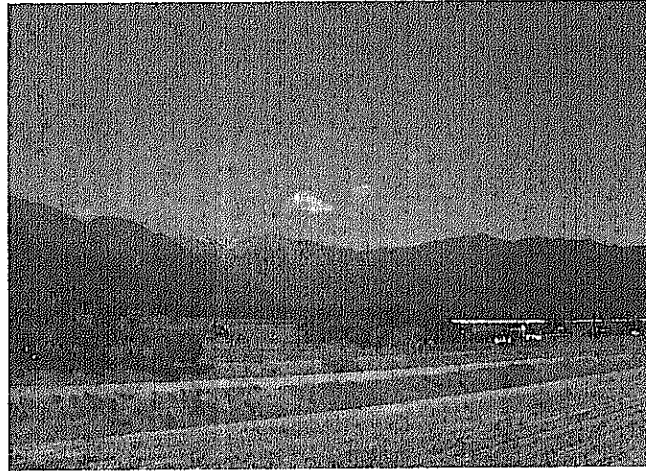
- 日 時：平成16年度10月10日(日)
 場 所：駒ヶ根市広小路・銀座
 内 容：伊南4市町村の市民で結成される実行委員会が中心となり、地域と訓練関係の交流、国際化まちづくりを目標に、ワールドブース、ワールドレストラン、ワールドステージ等開催。



各国自慢料理が並ぶワールドブース



隊歌を熱唱する候補生有志



協力隊通りから望む駒ヶ岳

TOPICS

隊員候補生の生活、今と昔

駒ヶ根訓練所は昭和54年の開設以来25年を迎えたが、その間2度の大きな増築工事が行われた。59年に3年間倍増計画が打ち出され、候補生人数が急激に増加。研修棟の増築に加え、宿泊棟の居室1人部屋に2段ベッドが導入され2人部屋体制が約15年間続いた。その後、更に派遣人数の増加を目的に、1隊次最大240名を収容できる施設を目指し、平成11年増築工事が開始された。そして、居室は再び独り部屋となった。これにより、宿泊棟に於ける候補生の生活は完全にプライバシーが保てる快適な空間となった。同時に、入所時の候補生の荷物が急に増え、段ボール箱2つ程度では全く収まらず、呆れるほどの荷物を持参する者まで現れるようになった。その一方で、仲間との2人部屋という生活を通じ、他人と協調すること、自我を抑えること、また人に迷惑を掛けないことなどを否が応でも味わわなくてはならない機会は残念ながら非常に少なくなった。

また、候補生人数の増加に伴う大きな変化として、男女比率の逆転が挙げられる。現在女性7に対し、男性が3というケースも珍しくない。平成5年度頃からは男性風呂と女性風呂を逆にした。またスポーツ大会の種目も女性が参加し易いものに変化するようになった。さらに、色々なバックグラウンドを持った候補生が入所してくるようになり、海外渡航経験者や留学経験者、また現地語の既習者、国際関係や国際協力の既習者の増加、さらには年齢の幅、ステータスの幅、既婚者の参加など、様々なバックグラウンドを持った人達が増え、画一的な訓練内容を実施することが徐々に難しくなっている。また活動分野、職種の拡大に伴い、候補生のカラーも実践的技術屋タイプから頭脳系理論派タイプへと変りつつあると言える。

訓練所での生活は開設当初から一貫して集団合宿生活をとっているため、基本的な部分、器の部分では余り変わってはいないとも言える。しかし、入所してくる候補生自身の気質、経験、学歴等のバックグラウンドが多様化しており、必然的に訓練メニューの改善もなされてきている。基本的には、候補生が訓練に取り組みやすい環境作りを設定しつつ、候補生の自主性、自発性を助長していくことを訓練スタッフ一丸となって臨んでいる。しかし、一昔前の厳しい訓練と言うイメージは徐々に薄れ、如何に楽しい訓練生活を送るかが目的となっている感じを受ける。昔から続いているシステムを踏襲するのも良いことであるが、時代とともに、移り変わる環境の変化に合わせた柔軟な軌道修正と改善に努め、候補生自身が単に楽しかったと言う形容詞で訓練生活を終えることなく、自主的に切磋琢磨し常に自らの適性を向上していく場として訓練所を見て貰いたいと願う。

JOCA総括
堀田康雄